

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育／**研究**)

法人名 岡山大学

学部・研究科等名 文学部

## 1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

質の向上度の事例名：事例3「社会に対する研究成果の公開・還元への取組」(分析項目Ⅰ，Ⅱ)

## 2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

平成20年度・21年度も引き続き、公開講座のほか文学部プロジェクト等の一環として、公開の講演会やシンポジウムを多数開催し、研究成果を社会に公開・還元するための取組を積極的に行った(資料1)。特に文学部教員とエルミタージュ美術館員等による公開シンポジウム(「ロシアにおける東アジア美術」2008年12月21日 社会文化科学研究科主催)には多数の市民が参加したが、このシンポジウムは山陽新聞第1面トップで大きく取り上げられ、研究成果を広く社会に知らせることができた(2008年12月21日付「山陽新聞(朝刊)」)。

文学部は、第1期中期計画において、①「日本文化の固有性の探求」、②「空間情報学における人文科学研究」、③「ジェンダーに関する学際的研究」を3大プロジェクトとして立ち上げ、さまざまな研究活動を行ってきたが、平成20年度には、①に関して、前年度のシンポジウムの成果をまとめた『揺らぎの中の日本文化』を公刊した(ISBN978-4-904228-03-6C3070 岡山大学出版会2009年3月31日)。一般読者向けに編集された本書は、日本文化を新しい観点で多面的に分析したもので、文学部の研究成果を社会に公開・還元する良い機会となった。さらに、専門書や論文以外に、文学部の教員が研究成果を一般向けに書き下ろした著作は、毎年コンスタントに出されているが(資料2)、このうち『働くこととジェンダー』には、③に関する成果の一部が示されており、文学部のジェンダー研究が社会に還元される一助となった。また、とくに注目すべきは、本学教員による一般向けの学術書『列島創世記』(松木武彦著2007年11月)が平成20年度「サントリー学芸賞(思想・歴史部門)」を受賞したことである。これにより本学部の考古学研究は社会から大きく注目され、またその研究成果が人口に膾炙するところとなった。なお、考古学教室では、平成20年度・21年度、県下吉備地方での造山古墳周濠の発見(②の成果)、千足古墳の装飾文様の保存、未盗掘古墳(勝負砂古墳)の画期的な発見・報告など、地域に根ざした目覚ましい活動を行っており、考古学や歴史に対する全国の社会的関心を高めるのに大きな貢献を果たした。以上のように平成20年度・21年度には、研究成果の公開・還元面で、前4年を大きく上回る取組が行われた。

## 資料1：平成20，21年度の公開講演会・報告会等

○公開講演会：「キリストの肖像画と手紙」(08/4/2 A. リドフ) / 「梅若丸伝説について」(09/1/13 V. デュヴェルジュ) / 「後期ローマ帝国における貧困と危機」(09/3/21 P. アレン) / 「蓮華と十字架」(09/9/7 K. パリー) / ○公開シンポジウム：「ロシアにおける東アジア美術」(08/12/21 A. ボゴリューボフ，福間加容，龍野有子) / ○シンポジウム：「平塚らいてうー日本のフェミニズム運動における彼女の位置および家族制度に対する彼女の批判」(09/7/16 C. レヴィ) / ○公開研究報告会：「転換期における「貧困」に対する取り組みの共同研究」ほか(09/3/21) / ○文学部公開講演会：「ビザンティンにおけるイメージの力」(09/9/8 K. パリー) / ○プロジェクト公開研究会：「これからの大学と博物館教育」(10/2/18 新納泉，前沢和之，吉田広ほか)

(出典：社会文化科学研究科資料)

## 資料2：平成20，21年度の一般向けの主な著作

○倉地克直著『徳川社会のゆらぎ』小学館08年11月 / ○下定雅弘著『柳宗元』勉誠出版09年11月 / ○中尾知代著『日本人はなぜ謝りつづけるのか』NHK出版08年8月 / ○松木武彦著『進化考古学の大冒険』新潮社09年12月 / ○倉地克直他編著『働くこととジェンダー』世界思想社08年4月 / ○松木武彦他編著『集落からよむ弥生文化』同成社08年9月

(出典：社会文化科学研究科資料)